



感動は無限大 南部九州総体 2019 大会レポート

響かせろ 我らの魂 南の空へ



全国高等学校体育連盟テニス専門部

近畿地区常任委員 永井 清二

紺碧の日向灘の上、霧島山を目指して空路宮崎入りすると、県木のフェニックスが旅人を出迎えてくれる。「青い海、緑の山、風にそよぐ木々」この南国旅情の鉄板は、否が応でも人々を開放的な気分に誘ってくれる。しかし、どうやら誘われるのは人間ばかりではないらしい。

「響かせろ我らの魂南の空へ」のスローガンのもと、令和元年度全国高等学校総合体育大会テニス競技が始まった。宮崎市民文化ホールで行われた開会式では、宮崎県高等学校体育連盟テニス専門部飯干部長による開会宣言を皮切りに、優勝旗・優勝杯返還、レプリカ贈呈、主催者挨拶と進み、



宮崎県立宮崎農業高等学校瀬口詠理さんのもとほっこりとした歓迎の挨拶、佐土原高等学校日高主将と宮崎商業高等学校渡辺主将の、丁寧で力のこもった選手宣誓。その後は恒例の歓迎セレクション、巨田（こた）神楽保存会の佐土原高等学校の生徒による古式ゆかしき歌舞が披露され、その後は同じ舞でもすっかり趣が変わり、宮崎県立大宮高等学校ダンス部による創作ダンスが披露された。さすが日本神話発祥の地宮崎、芸能も間口が広い。最後は歴代優勝校、選手の名が映像で流れて終了となった。



インターハイの初日を飾るのは、学校対抗団体戦。第1日目は拮抗した実力のせいであろうか、例年以上に試合時間がかかり、日程終了が遅くなってしまった。第2日目はベスト8をかけた重圧のかかる対戦が繰り広げられ、男子のベスト8は関東1、東海2、北信越1、近畿1、九州3校、女子は関東2、北信越1、東海1、近畿2、中国2校となった。この日厳しい暑さの為に体調を崩す選手が増え、団体最終日は準決勝・決勝とも3セットマッチが予定されていたが、8ゲームズプロセットになり、90分の休憩を挟むようルール変更された。



最終日男子準決勝は、第1シード相生学院（兵庫）と九州王者柳川（福岡）、第2シード湘南工科大附（神奈川）と東海王者四日市工業（三重）との対戦カードとなった。相生学院は安定感抜群のS2 東③が先勝し、ダブルスでも柳川の底力が一歩及ばず 8-6 で相生学院が制

した。ただ、その直後の S1 の対戦では柳川・小川③が粘り勝ち、存在感を見せた。もう 1 試合は第 2 シード湘南工科大附が自力を発揮し、決勝に駒を進めた。

決勝は春の選抜決勝と同じカード、相生学院と湘南工科大附との対戦となった。ダブルスの中村③・清原③がスタート良く飛び出し、田中③・齊藤②を寄せ付けず 8-1 で勝利した。相生学院 S1 高畠③が持ち前のストローク力で 8-1 と圧勝、春・夏連覇を成し遂げた。また、圧巻のサービスとフォアストロークが武器の S2 東③は、見る者に将来を期待させる選手であった。



一方、女子準決勝は第 1 シード相生学院（兵庫）と 3 年前の覇者野田学園（山口）、昨年の準優勝校仁愛女子（福井）と 1 昨年の覇者四日市商業を破った早稲田実業（東京）との対戦。相生学院にいつもの伸びやかさが感じられないのは、これが夏・春・夏の団体三連覇達成への重圧なのか？ S2 松下③は勝利するが、S1 もダブルスも野田学園の勢いに跳ね返されてしまう。結果は 2-1 で野田学園が 2 回目の決勝進出を決めた。もう 1 試合は団体戦初優勝を狙う早稲田実業が、粘りが信条の仁愛女子を 2-1 で寄り切った。決勝戦、良いスタートを切ったのは野田学園ダブルスの南口③・牛尾②、8-1 で対戦を終え仲間の勝利を待つことに。S1 早稲田実業の神鳥③は、粘る徳安③を 8-5 で振り切り 1-1 のタイに。今大会一番の観客が S2 対決が行われている 12 番コートに集まつた。ネットに出て自分の得意なパターンに持ち込みたい野田学園鈴木②に対し、緩急をつけてミスを誘いたい河野②は第 13 ゲームをブレークし 7-6 とリード。マッチポイントでは絶妙なロブが決まり、どうしても欲しかった念願の初タイトルを手に入れ、新たな歴史に校名を刻んだ。



表彰式は空調の効いた木の花ドームで執り行われ、それぞれが勝ち得た栄冠に酔いしれた。



個人戦は台風 8 号接近に伴い試合方法が変更された。シングルス・ダブルス共に QF まで 1 セットマッチ（セルフジャッジ）に、それ以降は 8 ゲームズプロセットに変更された。

その中で勝ち上がったのは以下の 8 名と 4 組。男子シングルスは下村②（神奈川・慶應義塾）、東③（兵庫・相生学院）、間仲③（埼玉・秀明英光）、大田③（三重・四日市工）、松下③（埼玉・秀明英光）、小川③（福岡・柳川）、望月③（神奈川・湘南工大附）、藤原③（京都・東山）。女子ダブルスは川出③・高橋③（愛知・愛知啓成）、内島①・西①（神奈川・白鵬）、伊藤②・上伊倉②（埼玉・浦和麗明）、大川③・毛呂②（神奈川・法政二）。

個人戦2日目、男子ダブルスと女子シングルスが行われる予定であったが、冒頭に書いた「南国旅情」に誘われた台風8号が、早朝宮崎市に上陸し九州を斜め横断。警報発令のため試合開始が大幅に遅れ、13時から昨日同様の試合形式で試合が始まったが、予定通りに消化することができなかった。



個人戦3日目、台風一過と思いきや一向に安定しない空模様。椰子の木の合間に見える煙った木々は間違いなく南国、まさしくスコールなんだ。男女ともサスペンデッドになった試合から始まり、男子ダブルスは松下③間仲③（埼玉・秀明英光）、横田③飯田②（栃木・足利大附）、藤原③堀川②（京都・東山）高畠③中村③（兵庫・相生学院）がB4。女子シングルスは神鳥③（東京・早稲田実業）、堤③（三重・四日市商）、照井③（北海道・札幌啓成）山崎③（千葉・秀明八千代）、浮田③（埼玉・秀明英光）、吉川③（神奈川・湘南工科大附）、吉本①（岡山・岡山学芸館）、山口③（大阪・城南学園）がB8に名を連ねた。



男子シングルスは、互いに長身で力強いプレースタイルを信条しながら、雨を吸った重いボールをしっかり叩いた下村が東を下し、松下が小川を、大田が間仲を、藤原が望月を下し準決勝に駒を進めた。男子ダブルスは関東対決を横田・飯田が制し、近畿対決を高畠・中村が制し決勝に進んだ。一方女子シングルスでは1シードの神鳥が堤を、フラット系のボールでリズムを作る照井が山崎を、力強いストロークの浮田が吉川を、老齢なテニスで2シードの山口が吉本を下し準決勝に進み、女子ダブルスでは1年生ペアを翻弄した川出・高橋が、関東対決を制した大川・毛呂が決勝に駒を進めた。最終日に男女ともシングルスとダブルス両方に残った選手は1人もいないトーナメントになった。

いよいよ最終日、思えばよくここまでたどり着けたものだ。今日は全て8ゲームプロセット、当然昨日までとは試合展開が異なる。男子シングルス準決勝では、長身を生かした力強いサーブとストロークの対決は大田が8-6で、もう一試合は藤原がシュアなテニスで、松下を8-3で退けた。

決勝は大田と藤原、春の選抜個人戦の再現で、日韓中ジュニア交流競技会メンバー同士の戦いでもある。序盤互いにミスを避ける丁寧なテニ



スでサービスキープが続く。第8ゲームで藤原がブレークしたが、大田も次のゲームをブレークバックしその後5-5まで一進一退。しかし、高いデフェンス力から、短いボールを有効的に使い3ゲーム連取した藤原が栄冠を勝ち取った。

女子シングルス準決勝、1シード神鳥と照井とのサウスポー対決。強気でプレーする神鳥に対し、照井はフラットなショットが要所で深くライン際に決まり、ミスが増えた神鳥を下した。

準決勝もう一つの戦いは、春の選抜個人戦優勝者の山口と、パワフルなテニスを続ける浮田。浮田はバックハンドのクロスからダウンザラインへのショットでリズムを呼び寄せ、第8ゲームをブレークし差を広げる。中盤良い流れが来ない山口も第11ゲームをブレークし、5-7まで挽回したが破れた。決勝戦は浮田と照井の早いストロークの応酬だが、ラリーの球数がとても多い。中盤第8ゲームのブレークで流れを引き寄せた照井がその後のゲームを支配し8-4で勝ちを収め、全てのカテゴリーを通じて大会史上初めて優勝旗が津軽海峡を渡った。

男子ダブルス決勝は、トーナメントを駆け上がってきた足利大附横田・飯田と第2シード相生学院高畠・中村の対戦。序盤から優位に試合を運んだ高畠・中村が団体優勝との2冠を獲得した。女子ダブルス決勝は愛知啓成の川出・高橋と法政二の大川・毛呂との対戦。展開の早い積極的なテニスで良いスターを切った川出・高橋が、栄冠に輝いた。



酷暑のせいだけでは無いだろうが、熱中症と判断され救急搬送されたり、招かれざる客“台風8号”的直撃で、試合形式や補助員の体制が目まぐるしく変わる大会であった。しか

しながら、選手・運営サイドの皆さんの適応力のおかげで、例年同様各部門の優勝者が決まったことは大変有意義であった。長い歴史を持つこの真夏の7日間の戦いは、今、大きな岐路に立っているかもしれない。

次回2020年は東京オリンピックとパラリンピックの合間に、滋賀県長浜市で行われる。全ての種目が大過なく、また滞りなく実施される事を祈念し、レポートを終了する。



